

武漢大学留学報告書

(2017年2月26日～3月31日)



医学部 5年 久米佑佳

●はじめに

私は2017年2月26日から3月31日までの34日間、福島県立医科大学の国際交流事業

の一環で武漢大学医学部に留学させて頂きました。1カ月も海外に滞在するのは私にとって初めての経験であり、この経験は非常に貴重なものとなりました。このレポートでは私が中国で学んだこと、感じたことを報告いたします。今後武漢大学に留学される方のみならず、中国に少しでも関心がある方の参考になればと思います。

今回留学プログラムの応募の際私は武漢大学を希望しましたが、その理由は3つありました。1つめは、他国の医学部に留学することで日本と他国での文化や医療制度やその水準を知り、今後日本で学ぶ上でそのことを意識しておきたいと考えていました。2つめは、私は中国語に元々興味がありました。そして中国語を母国語とする人口の多さと近年の中国の目覚ましい経済発展を考慮すると、将来的にも中国語の重要性は高まっていくと予想されます。しかし、日本ではなかなか学習モチベーションを維持することが難しかったので、現地にて学びたいと強く思っていました。3つめは、日本の漢方は中医学が基礎となっており、その実際の治療の様子を中国で見たいと強く思っていました。

志望理由は以上の3つですが、実際に留学してみて、この3つの目的以上の沢山のことが学べました。後ほど詳しく述べますが、様々な人と関わり、多くの意見を交換し、教え教えられ非常に有意義な留学となりました。

●武漢市及び武漢大学について



武漢市は中国湖北省東部に位置する都市です。3800年の歴史を持ち、また経済的重要性から大幅な自主権を持つ副省都市に指定されています。湖北省という名の通り多くの湖があり、武漢市にも数多くの湖があり、水域面積は全市面積の約4分の1を占めます。その中でも東湖は中国で都市部にある湖としては国内最大です。

武漢市は長江を挟んで武昌、漢陽、漢口の3つの地域があり、武昌は文化教育区、漢陽は工業製造区、漢口は商業貿易区として発展してきました。武漢大学は武昌に位置します。武漢には国立大学が8校、他の公立大学が23校、私立大学が23校あり、短期大学を含め89校があります。大学生数、大学院生の総数は計106.4万人であり、これは広州市に次いで中国2位です。

武漢大学は非常に歴史のある大学で、前身は清代の1893年に創立された自強学堂です。1928年に国立武漢大学と正式に名称が制定されました。1938年から大学の敷地と施設が丸

ごと日本軍に占領されましたが、終戦後に返還、再建されました。日本軍占領時に武漢大学の学生寮は傭兵の療養所となり、故郷を思う傭兵の気持ちを緩和するために日本から桜の木が寮の前に移植されたといわれています。その後、桜は老朽化のため一新され、現在ある桜は1972年の日中国交正常化のお祝いとして、田中角栄首相が中国の周恩来首相に贈った1000本の一部になります。3月は丁度桜が咲き誇る時期で沢山の観光客が桜を見に来ており、メインキャンパス内は人で溢れていました。美しい伝統的な建物と多くの桜が融合した風景はとても美しかったです。(写真1)

武漢大学には30種類の学部があり、文学、法律、理学、工学、能楽、医学の6大領域の学部があります。在校生数が非常に多くアジア諸国や欧米からの留学生も沢山来ているため、非常に大きな大学です。

武漢大学医学部は2000年に湖北医科大学が武漢大学に合併したことで誕生しました。福島県立医大は前身の湖北医科大学と1996年に協定を結んで以来、教員や学生の派遣し合い交流を深めてきました。医学部キャンパスには基礎医学院、第一・二臨床学院、航空医学院、役学院、公共衛生学院、HOPE看護学院、医学技術学院があり、医学部キャンパスの隣には附属病院である中南病院が併設されています。



歴史的な学生寮



医学部キャンパス入口の毛沢東像



写真1

●所属講座と実習

今回、私は中医学講座に配属となりました。初めの1週間は中医学を基にしたリハビリテ

ーション科、次の2～3週間は中南病院中医科の入院棟と外来棟を見学しました。中医科とは西洋医学と中国伝統医学である中医学を融合して用いて治療を行う内科です。(因みに、中医学と日本の漢方の違いですが、中医学は約3000年前に記された中国最古の医学書『黄帝内経』が起源で、それを基に代々の中国臨床家の努力や研究によって補足され、現代の中医学の体系として形成されてきました。一方、漢方は朝鮮半島から伝来した「韓医方」と中国大陸から伝来した中医学に日本の漢方学がミックスされた伝統医学です。)

中南病院中医科の外来診療は主に以下の5つに分類されていました。

1. 中医腫瘍内科：腫瘍化学治療との併用
2. 中医リウマチ科：リウマチ・膠原病などの自己免疫疾患
3. 中医女性内科：更年期障害、月経異常などの婦人科疾患
4. 中医内分泌：糖尿病、アトピー性皮膚炎、気管支喘息など
5. 中医一般外来

また中医科で行う治療は以下の6つの目的に分類されていました。

この中で最も重要でかつ頻度が高いものは3と5だと仰っていました。

1. 冷え性や虚弱体質など、西洋医学ではあまり治療の対象とならない場合
2. 副作用のために西洋医学的治療を十分に受けられない場合
3. 西洋学的治療に漢方医学の長所を加え、より一層の効果を期待する場合
4. 各種慢性疾患の進展予防を目的とする場合
5. 抗がん剤治療による副作用の軽減を目的とする場合
6. 認知症の行動・心理様態の軽減を目的とする場合

一般的な内科と大きく異なる点は、やはり、処方する薬に生薬が含まれること、鍼灸による治療を行っていることです。中南病院の薬局は2つあり、西洋薬と中医薬で分かれています。中医薬を処方する薬局の在庫は以下の写真の様に、小分けされた生薬の束が大量に保管されていました。



鍼灸による治療では、まず中医学的診察方法から患者の身体を総合的にとらえ、経穴(俗にいうツボ)を選んで鍼を入れたのち、より効率的に効果を得るために電気を流してしまし

た。鍼の太さも様々で、鍼を使う場所によって使い分けていました。



●中国の医療事情

中国では、受診する医師のランク別初診料、診療内容、使用する医療関連機材、医薬品、その詳細な価格を病院やネットで公開しています。また、保険制度は各市で運営しているため、直轄の市以外で受診した場合は全額自己負担となります。日本の様に、患者が望めばいつでも誰でもどこの医療機関でも医療を受けられる「フリーアクセス」はありません。そして、中国では病院が日本以上に自由に選択できます。このため患者が大規模病院に一極集中してしまっています。一極集中を避けるために行われている策についてですが、入院の場合では、同じ治療費でも2級病院では保険の負担割合が3級病院より2%ほど軽減されます。また、通院の場合では小規模医療機関である社区卫生サービスセンターでの自己負担割合は10%ですが、自身が選択した1～3級病院では30%になります。

●中国の保険事情

中国では2020年までに「皆保険」の実現を目指しています。日本の皆保険と違う点としては、強制と任意が並存している、其々の制度構造、保険料に違いがある、入院、通院あるいは病院により負担割合が異なるといったことが挙げられます。

中国の公的医療保険制度は本人の戸籍（都市戸籍、農村戸籍）、就業の有無によって「都市職工基本医療保険」（強制加入）と「都市・農村住民基本医療保険」（任意加入）に分類されます。前者は都市で働く企業就労者（都市戸籍・農村戸籍）・自営業者・公務員などが被保険者で、後者は都市戸籍の非就労者・学生・児童・農村住民が被保険者となります。どちらの制度も2階建て構造となっており、1階部分の基本医療保険からは一定額まで基礎的な給付が受けられます。これを上回る高額な医療費については、2階部分の高額医療保険から給付が受けられます。また、2階部分でも一定の自己負担が必要となっており、日本の高額医療保険制度とは異なって限度額が設けられています。

●現地での生活



私達は医学部キャンパス内にある迎賓楼という寮に 1 カ月滞在しました。電気や水道が止まるといったことはありませんでしたが、暖房の効きが非常に悪く 3 月上旬は寒い思いをしました。部屋には冷蔵庫、テレビ、洗濯機が備え付けられていましたが、洗濯機以外はほぼ使用しませんでした。写真左から迎賓楼の外見、部屋の様子、シャワーの様子です。



普段の食事は主に学食やコンビニで済ませていました。医学部キャンパス内に食堂は 2 つあり、どちらも 2 階建てです。しかし大抵のメニューは学生カードのみでの支払いとなっており、学生カードを持たない私は迎賓楼近くの食堂の 2 階で食事をしていました。この場所でのみ現金での支払いが可能なのですが、その方法に私は少し手間取ったので、今後の参考になればと思い記しておきます。まず、左の写真奥のカウンターに行き、食べたいメニューの金額を伝えます。すると、どの店のメニューかを問われるので店名を答えます。そして支払いをし、その金額が記されたレシートを受け取り、そのレシートを店に持っていきメニューを伝えれば大丈夫です。ここ（食堂）で食べるのか、持ち帰るのかを聞かれることもありますので、場合に応じて答えましょう。英語は全く通じないので、メニューの名前から受け答えまで全て中国語でしなければならず大変でした。学食の値段は高いメニューでも 10 元（160 円ほど）で、とてもお得です。種類は数多くあるのですが、味は当たりはずれがあると感じました。私は餃子と三鮮豆皮と白餡が入った菓子の様なものをよく好んで食べていました。

日用品で必要なものがあれば学食前にあるスーパーで揃えることができます。キャンパ

ス内で生活から勉強まで全てを行うことができ、とても便利だと思う一方、殆どの学生が寮生活をしているためプライベートがあまりないとも思えました。

武漢では他にも多くの美味しい料理を食べました。以下の写真とともに特にお勧めのものを説明させていただきます。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)

(写真1) 熱乾麵。こちらは武漢で最も有名な麺料理で、武漢の人々は朝食に食べるそうです。太めの汁なし麺にゴマダレがかかっており、一杯3～5円で売られています。私も滞在中には何度も食べました。

(写真2) 戸部港の店で食べた、鮮魚糊湯粉。野生のフナを煮込んでスープに用いており、濃厚ですがさっぱりとした味でした。

(写真3) 戸部港の有名店「四季美」の湯包。小籠包かなと思いきや、具と汁ごと皮に包まれておりとても美味しかったです。

(写真4) 南京料理の店で食べた、地鍋小公鳥。南京料理は甘い味付けが特徴で、滞在中は日々辛い物を食べていた私にとって新鮮でした。

(写真5) 火鍋。2、3種のスープを選び注文した具材を自分達で茹でるのですが、とても美味しかったです。武漢には火鍋の店が沢山ありました。



放課後や休日には中医学の先生や武漢大学の生徒達に色々な場所に連れて行ってもらいました。移動手段は主に徒歩、車、バス、地下鉄でしたが、中国の交通状況には色々と衝撃を受けました。まず、中国の方々は交通ルールを守りません。歩行者は赤信号であれ自分の好きな時に渡り、車のクラクションは最早コミュニケーションかな？と思える程に鳴り響いています。中国で運転するのはかなり至難の技だと思いました。地下鉄ではテロ対策のために空港のような荷物検査が行われていました。ただでさえ人が多くて混雑しているのに、この荷物検査のために更に行列ができていました。

●観光



メインキャンパス内の博物館の外観とその中の展示の様子、またメインキャンパス近くのサイクリングスポットです。中国ではレンタル自転車がとても普及しており、至る所で自転車を見かけました。ここはサイクリングや散歩の為に環境が整備されており、気持ち良く運動をすることができました。



漢街 (Hang Street)

医学部キャンパスから徒歩20分程のところにある海外ブランドや飲食店が立ち並ぶ通りです。観光客が多く訪れており、特にライトアップが綺麗な夜はいつも混雑していました。服飾店でも飲食店でも価格は高めでした。



戸部巷 (Hubu Alley) と長江 (Chang River)

戸部巷は長江大橋の近くにあり武漢で有名なB級グルメの屋台が並んでいます。メインの通りは150メートルの長さで4メートルの幅があり、百年の歴史を持っている古い路地です。清の時代にこの路地は藩台役所(戸部に属する役所)の隣にあるためにこの名前になったそうです。私が訪れたのは朝でしたが、朝から人で混み合っていました。座って食べる席はない店が多かったので食べ歩きを楽しみましたが、大きな串を持って食べ歩く人々の姿には文化の違いを感じました。

長江は中国及びアジアで最長の川で、中国国外では「揚子江」の名でよく知られています。古くから水上交易の中心的な交通路として利用されてきました。PM2.5や排気ガスの影響が対岸の景色があまり綺麗に見えないのが残念でした。中国の大気は普段日本で暮らしている私にとってとても汚染されているように感じました。また武漢は内陸ということもあり、より一層空気が悪いようです。しかし、街でマスクを着用している人はほとんど見受けられなかったのが、皆この環境に適応しているのかなと思いました。

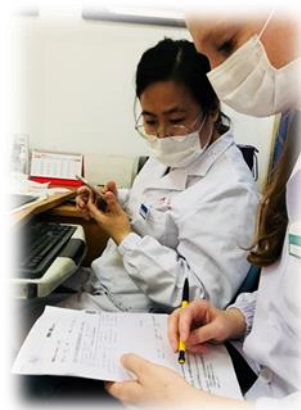
●学生や先生との交流



(写真1)



(写真2)



(写真3)

(写真1) 中医科の ke 先生
(写真2) 日本語が堪能な張ちゃん和高ちゃん
(写真3) 中医科の夏先生とフランス人留学生のキャチャー
(写真4) 昨年福島医大に留学に来たみんなと



(写真4)

5週間という短い滞在期間でしたが、本当に色々な方にお世話になりました。特に中医科の ke 先生は4年間日本に留学されていたことがありとても日本語が堪能で、中医科の入院患者の説明や中医学の基礎を日本語で解説して下さっただけでなく、武漢市内の観光に連れて行って下さいました。ご自分の仕事があり忙しい中、本当に良くして頂き感謝の気持ちしかありません。中医科の夏先生は英語がとても堪能で外来患者の説明や鍼灸の方法について詳しく教えて下さいました。医療英単語は分からないものが多く、自分の勉強不足を痛感させられました。

また、歯学部と医学部の学生である張ちゃん和高ちゃんとはとても良い友人になりました。二人とも日本語のクラスを受講しており日本語を勉強していました。平日は医学の授業で埋まっているため休日に語学のクラスを受けているそうで、休みがなく大変だと言っていました。でもその熱心の勉強の賜物か二人とも日本語を上手に話しており、ただただ尊敬

しました。武漢大学の学生は勤勉な方が多く、放課後の図書館は席がないほど学生で埋まっています。専攻の医学だけでなく英語やその他の語学に対する勉強意欲も高く、学生の英語レベルは日本の医学生に比べて高いと思いました。これは中国における英語教育が小学校から始まることも一因だそうで、国を挙げて英語教育に力を入れるのは重要なことだと感じました。

そして、武漢最終日には以前福島県立医大に留学された二人の先生方が火鍋に連れて行って下さり、先生方が福島にいらっしゃった時のエピソードを聞かせて下さり楽しい時間を過ごしました。交流協定を結んで以来両大学が築き上げてきた絆を感じ、この繋がりを次の代につなぐ役割を担えたことをとても光栄に思いました。

●終わりに

私は今回の留学で多くの刺激を受けました。そして様々な出会いがあり、日本とは異なる国民性や価値観や文化の違いから人の温かさまで、多くのものにふれて自分自身を見つめ直す良い機会になりました。海外に1カ月間滞在するという経験は、今までの自分の世界がいかに狭いもので偏った思考であったかを思い知らせてくれました。中国という日本と近いながらも全く異なる環境に身を置くことで、日本がいかに豊かな国であるかを再認識することができ、この環境に甘んじるのではなくこの環境を生かしてより自分を高めていけるように努力しなければならないと思いました。日本の医学生は将来がある程度保証されており、裕福な家庭の子息も多いです。一方、中国では医師の地位や給与はあまり高くはなく、日本ほど将来の保証はされていません。そのため医学のみならず語学の勉強にも力を入れ、自分の可能性をより広げていこうという意気込みを感じました。

また、日本人は謙虚であることが美德であるとされ、その考えが無意識のうちに働いてしまっているのか自分の意見をはっきりと伝えることに躊躇ってしまうことがあります。しかし、海外においては自分の要望や意見をどんどん言っていないと得られる情報量において周囲と大きな差がついてしまいます。躊躇わずに自分の意見をしっかりと発言することの重要性をひしひしと感じました。そして自分の意見をしっかりと伝えるためには英語の勉強が必須であると強く思いました。ですから、帰国後も英語の勉強は続けていきたいと思えます。

最後になりましたが、今回この貴重な留学のためにご尽力いただきました、関根先生、和栗先生、國分様を初めとする先生方、企画財務課、教育研修支援課の方々、武漢大学の方々、中南病院の先生方全てに深く感謝いたします。ありがとうございました。